



個人研究

スマート社会

組織の自己変革能力獲得のためのマネジメント



企業活動において、価値を直接生み出すのは仕事が行われる現場です。現場が持つ潜在力を発揮し続けるためには、仕事の効果と効率を両面とも高めることが必要となり、改善活動を始めた自己変革を行う能力を獲得することが重要です。そのためにどのようなマネジメントを行うべきかについて研究を行っています。

KEYWORDS オペレーションマネジメント、ルーティンダイナミクス、ダイナミックケイパビリティ

RESEARCHER

コンピュータサイエンス学部 講師 山口淳



主な学会発表・論文・著書・社会活動

[1] 改善活動の活性状態に関するフレームワークの提案；経営情報学会誌，vol.26，No.4.P.241 - 271；2018/3

[2] Study on Standstill Conditions in Kaizen Activity-Through Case Studies of Two Companies in their Long-term Efforts -Industrial Engineering & Management Systems ,vol16 ,No.1., pp.80-91, 2017/3.

[3] 『スターバックス コーヒージャパン株式会社2002 (A) — 成長と変容 —』、『スターバックス コーヒージャパン株式会社2002 (B) — 改革と成果 —』、『スターバックス コーヒージャパン株式会社2002 ティーチャングノート』いずれも慶應義塾大学ビジネススクール・ケース；2020/7

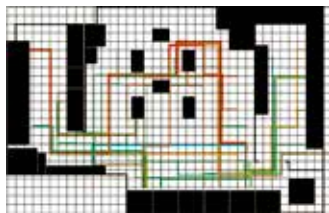
01 | 製造現場における改善活動長期継続事例の研究

日本の製造現場における改善活動は、KAIZENやLean Production Systemという言葉とともに、概念や方法論が海外に輸出されて、研究面でも国際的に近年活発さが増す領域となっています。このような改善活動を10年以上の長期に継続している企業を対象として、日々の改善活動の実施と、時に改善活動の方向性の大きな変化を両立させるための能力やその獲得に至るマネジメントを研究しています。



02 | 現場の安定と変化を生むルーティンの動的状況

環境変化がある中で現場が安定したオペレーションを実施することに寄与するのが組織ルーティンです。一方で、理論上ルーティンは変化の始端ともなり、変化の阻害要因にもなるとされています。ルーティンの実際の状況、その変化の様子、そして変化が妨げられる状況を解明し、大きな経営環境変化に対応するダイナミックケイパビリティ(企業の自己変革能力)を獲得するためのマネジメントへの示唆の提示を目指しています。



サービス業の作業者の導線分析の一例

03 | ICT化を含む自動化と現場のフレキシビリティ

近年、経営においてIndustry 4.0やDXなど高度な自動化が目立っています。一方で、自動化は柔軟性を奪い組織の自己変革能力の阻害要因にもなります。現場の柔軟性を確保する自動化のあり方を考察しています。

